

保育所保育士に求められている父親への子育て支援に関する研究 -父親へのインタビュー調査から-

著者	岡村 泰敬
著者別名	OKAMURA Yasuhiro
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	57
ページ	157-172
発行年	2021-03-15
URL	http://doi.org/10.34428/00012615

保育所保育士に求められている父親への 子育て支援に関する研究 —父親へのインタビュー調査から—

ライフデザイン学研究科生活支援学専攻修士課程修了
岡村 泰敬

要旨

本研究の目的は、保育所に子どもが入所している父親に対して、保育所保育士に求められている子育て支援とはどのようなものを明らかにすることである。本研究では、保育所に子どもが入所している等の選定条件を満たしている10名の父親にインタビュー調査を実施し、得られた10名分のデータをSCATにて分析した。そしてストーリー・ラインを「自身の子育てに関する支援」「子どもに関する知識の提供」「保護者間の交流の機会」「個別ニーズへの支援」の視点と「その他」に分け作成した。父親は保育所を子育ての拠点という認識をしていたが、保育所以外の施設は父親にとって子育ての社会資源としては機能していないと考えられた。その為、保育所及び保育士は、父親にとって子育てに関する社会資源として相談しやすい環境、支援を求める環境となるための取り組みを行うことが求められる。これらのことから、保育所保育士に求められている父親への子育て支援は、保育士は父親にとって社会資源として相談しやすい環境、支援を求めることができる環境をつくるための取り組みを十分に行うことである。その際には、ソーシャルワークの原則である人々と環境とが相互に影響し合う接点に介入することと個別化を基盤とした支援を行うこと、そして具体的な支援として保育士は、父親が明確に相談できると思える関わりをすること等が求められていることが明らかになった。

キーワード： 父親.子育て支援.保育士

1.研究の背景と目的

近年わが国では「イクメンプロジェクト」といった取り組みも行われ、男性の家事・育児への参加が求められるような社会に変化してきている。しかしながら、父親は子育ての悩み

を相談する人や場所がなく、地域の公園や子育て支援施設では、男性の居場所がないことが明らかにされてきている（ベネッセ教育総合研究所 2015）。ベネッセ教育総合研究所（2015）の調査では、2014年は46.3%の父親が、「園への送迎をする」とし、82.1%が「園の行事に参加する」と答えており、保育所及び保育所保育士と父親の関わりがあることがわかっている。また、2018年に改正された保育所保育指針においても、「第4章 子育て支援」で、保育所の特性を生かした子育て支援がうたわれ、子育て支援は保育所の役割とされている。そのため、保育所保育士は父親への子育て支援を行うことが可能であると考えられる。

しかし、父親だけを対象とした研究や保育所保育士が、父親に対してどのような子育て支援を行うことが求められているのかの研究は多くない。そのため、まず父親が現在どのような子育て支援を受けており、どのような子育て支援求めているのかを把握し、そのうえで保育所保育士が行うことのできる父親への子育て支援を検討することが求められている。

これらのことから、本研究では父親が保育所にどのような子育て支援を求めている、保育所は父親にどのような子育て支援を行うことができるかについて考察していく。そのため本研究の目的は、保育所に子どもが入所している父親に対して、保育所保育士に求められている子育て支援とはどのようなものかを明らかにすることである。本稿では、①父親の子育ての現状、②地域における父親への子育て支援の現状、③保育所における父親への子育て支援に関する先行研究を整理する。そのうえで、保育所に子どもが入所している父親に対してインタビュー調査を実施し、得られたデータ分析することで、父親が求めている子育て支援を把握し、保育所保育士に求められている子育て支援とはどのようなものかを明らかにする。

なお、用語の定義として、本研究における「子育て支援」の定義は保育所保育指針（2017）「第4章 子育て支援」を参考にし、次の3点：①保護者と保育者の相互理解②保護者の子育てを実践する力の向上③多様なニーズに対応するための個別の支援、に関する保護者との関わりや活動及び支援を本研究における保育所の子育て支援とする。

2. 先行研究の整理

本節では、父親の子育ての現状、地域における父親への子育て支援の現状、保育所における父親への子育て支援に関する先行研究の整理をしていく。

（1）父親の子育ての現状

近年わが国では、2003年の「次世代育成支援対策推進法」から父親の子育てや家事に目を向けるようになり、2010年の「イクメンプロジェクト」以降、父親が子育てや家事に参加することが社会的に求められるようになってきた。

船橋ら（2012）が行った25～49歳の男性への職業状況、日頃の意識、結婚観や家族に関する調査から、「子育てにも職業にも同じくらい関わりたい」が73.4%、そして「子育てより職

業を優先したい」が18.3%であり、予想以上に男性の育児遂行意識が見られたとした。

柳原（2007）による0～3歳までの乳幼児をもつ父親へのアンケート調査では、育児参加の状況では、「よくする」と「時々する」を合わせて73.1%であり、家事参加状況では、「よくする」と「時々する」を合わせて38.8%であった。「父親が相談したいと思う内容」については、「子どもの心・行動」が48.5%、「子どもの病気」17.9%、「妻が育児に悩んでいること」11.9%であったとしている。そして「育児について相談する相手」として、66.7%の父親が「妻」を挙げており、妻から育児知識を得ている父親は41.2%という結果であり、「妻」の影響が大きいことがわかる。しかし、「得られた知識は充分だったか」については、68.7%の父親が「かなり不十分」または「まったく不十分」と答えている。この調査から、育児に参加している父親が多いことと、子どもに関することを相談したいと思っていることがわかった。そして、父親は子育てに参加しているが、相談や育児の知識を得る機会に関しては不十分という状況であった。

そして父親も育児ストレスを抱えていることが明らかになっており、父親の育児ストレス項目に対して感じる情動として、「不安、恐怖、心配」が41.7%と一番高く、「怒り、イライラ」は40.0%、「疲れ」12.8%、「悲しみ・むなしさ」8.3%、「不満」は5.4%という結果であった（清水 2006）。

これらのことから、近年男性が子育てに関わりたという意識が高くなってきて、実際に子育てに関わる父親が増加している傾向がわかった。そして父親は、母親に育児に関する相談をし、母親から育児知識を得ていることが多いことがわかった。一方で、父親が子育てに関わることで、子育てに対してストレスを抱えていた。

(2)地域における父親への子育て支援の現状

父親への地域の子育て支援の現状として、まず子育て支援センターについてである。子育て支援センターを利用している父親への調査にて、「顔見知りができた」0.7%、「親に友達ができた」2.1%と低い結果となり、子育て支援センターは父親にとって親同士の交流の場としては十分には機能していないことが明らかになっている（鈴木 2011a）。また、子育て支援センターを利用している父親と母親を対象とした調査にて、子育て支援センターで知り合った人との交流について、母親は40.1%が「ある」と答えたのに対し、父親は9.3%という結果であった。この調査から、父親が子育て支援センターに来所する理由の視点は、第一に母親の育児負担軽減のための育児の援助、第二に家から近く、子どもにとって安全な場所で遊びたい、第三に子どものことについて学びたいという3点であることが示された（鈴木 2011b）。

小崎（2011）の子育て支援センターの父親支援プログラムに関する調査によれば、各子育て支援センターでの父親の1カ月の利用状況は、「1～5名」が43.5%と最も多く、「6～10

名」が8.4%、「11～20名」が7.8%と続いている。父親向けのプログラムを実施している子育て支援センターは9%であり、「行っていない」が75%で、「今後予定している」と「過去に行っていた」を合わせると90%の子育て支援センターが父親向けのプログラムを行っていないという結果であった。また、プログラムの実施頻度は、「1年に1回」が（32%）と最も多く、父親にとって子育て支援センターは、利用者としての父親の存在が認められにくいと指摘している。

次に児童館についてである。利用する男性からの意見として、「子連れ利用ができる男子トイレの整備等の希望等」の反面、「授乳の際の気遣い」などがあげられ、女性中心だった育児の現場に男性が入ってくることへの困惑として「男性が授乳室に入ること」「男性参加を気にする」「男性はプログラムに参加すべきでない」等を感じているという意見があることが正田ら（2016）が行った杉並区の児童館へのアンケート調査から明らかになっている。

その他、近年は「父親サークル」も存在しており、父親もネットワークの構築に努めている（小崎ら 2018）。小崎ら（2018）が、父親サークルの活動の取り組みや実態把握、活動内容や特徴を明らかにすることを目的に行った調査にて、父親サークルは「父親自身への働きかけ」「子どもへの働きかけ」「母親への働きかけ」「地域への働きかけ」を軸に活動していることが明らかになった。しかし「人が集まらないと思うか」の質問に対し、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせると、69.3%になり、79.0%が「新しいメンバーが増えない」という結果であった。この結果から父親サークルは、メンバーの固定化が起きやすいことや当初は活動に集中しているが、継続性までは意識が向かないといった傾向が見てとれるとしている。

父親が子育てに関わるようになり、一方で父親も育児ストレスを抱えているが、父親への地域の子育て支援は課題が多くあることがわかる。

(3)保育所における父親への子育て支援

保育士が行う子育て支援について、巽（2018）は、子育て経験のない親は、保育士等の子育て支援の専門家からのアドバイスに頼ることは多く、その影響はかなり大きいとしている。田辺（2017a）は保育所で行われている父親への子育て支援について、子どもが通う施設は父親と支援者がつながりやすいとして、子どもの話題を父親と共有できることは、父親への子育て支援の中では大きな強みになるとした。そして、子どもの成長の喜びや子育ての楽しさを父親と共有することが期待されていると述べている。

このように保育士が行う子育て支援は保護者への影響も大きく、期待されていることがわかるが、児童福祉法の保育士の定義においても「児童の保育」と「児童の保護者に対する保育に関する指導」を保育士の役割としている。そして、保育所保育指針（2017）では、「保育所を利用している保護者に対する子育て支援」と「地域の保護者等に対する子育て支援」

が保育所の役割とし、保育所保育指針解説書（2018）には、状況に応じてソーシャルワークやカウンセリング等の知識や技術を援用することの必要性も示されている。

保護者への支援の場面には、日常的な場面で行われる支援と特定の機会を設定して行う支援に分けられ、日常的な場面で行われる支援は、①送迎時、②個人面談、特定の機会を設定して行う支援には、①懇談会、②保護者と子どもの関わりを重視する行事、③保護者に子どもの様子を観覧してもらう行事、④保護者会行事、⑤子どもの成長を確認する行事とされている（西村 2016）。直接的な手段として、①送迎時の対応、②個人ノート、③クラスノート、④クラスだより、⑤行事、間接的な手段として、①保育場面での子どもとの関わり、②掲示物（展示物）、③室内の環境構成を挙げた（西村 2016）。また、濱崎（2017）は、父親への支援の実際の取り組みとして、①入園前後の関わり（入園前説明会等）、②毎日の関わり、③発表会・懇談会、④保護者説明会等を挙げている。一方、父親の子育て支援について、「父親のイメージ」に基づいた支援が展開されているとしているという指摘もある（田辺 2017b）。

また、柴山（2007）によると、親にとって子どもの保育所等への入園というのは、一定の時刻に子どもを園に送り迎えするという育児行為の出現であるとしている。しかし、送迎の際に普段の子どもの様子を伝えるなどの会話から、保育者と保護者の信頼関係が生まれ、保護者にとって保育士は、身近な子育ての相談相手となり、保育士がインフォーマルな子育て支援を行えていることも多いともされている（松尾 2015）。その他にも西川（2016）は、男性の育児の問題の改善には、家族以外に保育所を含む様々な社会資源が重要だとし、春見（2014）も地域で子育てしている人にとって、保育所、児童館、図書館等は貴重な社会資源としている。

先行研究を整理し、地域の父親への子育て支援は課題が多くあることがわかった。その為、本研究目的のもと父親が求めている子育て支援を把握し、保育所保育士が行うことのできる支援を検討していくことで、父親にとって子育てしやすい環境及び社会につながると考えられる。

3.研究の方法

本節では、分析の視点を定め、本調査内容、調査協力者の選定方法と調査協力者の概要、調査データの分析の方法と手順、そして最後に倫理的配慮を示す。

(1)分析の視点

本研究は、保育所保育指針（2017）に記載されている「保育所保育に関する基本原則」、「保育所における子育て支援の基本事項」、「保育所を利用している保護者に対する子育て支援」の内容を踏まえ、①自身の子育てに関する支援、②子どもに関する知識の提供、③保護

者間の交流の機会、④個別ニーズへの支援を分析の視点として設定したうえで、上記４点に基づいてインタビューデータを分析した。

(2)調査協力者の選定方法

本調査の調査協力者の選定条件は、①「父親であること」、②「子どもが保育所に入所していること」、③「共働き家庭であること」とした。そのうえで、これらの条件を満たしている、東京都、神奈川県に在住の10名を調査協力者として選定した。調査協力者の確保は、機縁法を用いて調査実施者が関わりのある保育所の園長に調査協力及び調査協力者の選定を依頼し、各保育所にて条件を満たしている保護者を選定していただき、調査の協力を依頼した。

(3)調査協力者の概要

調査協力者の概要は表３－１の通りである。調査協力者の年齢は31歳～45歳であり、平均年齢は38.2歳であった。調査協力者の職業は、会社員が６名、公務員、会社経営、自営業、大学職員が各１名で、居住形態は全員、夫婦と子のみであった。

表３－１．調査協力者の概要

名前	年齢	職業	結婚年数	居住形態	妻の職業	子どもの年齢
A氏	40歳	会社員	５年	夫・妻・子	薬剤師	１歳
B氏	45歳	会社員	14年	夫・妻・子	フリーライター	２歳
C氏	36歳	会社経営	９年	夫・妻・子	会社員	２歳
D氏	31歳	公務員	４年	夫・妻・子２人	公務員	２歳と０歳
E氏	37歳	会社員	５年	夫・妻・子	パートタイマー	３歳
F氏	42歳	大学職員	５年	夫・妻・子	SE	５歳
G氏	32歳	会社員	４年	夫・妻・子２人	保育士 (育児休暇中)	１歳と０歳
H氏	37歳	会社員	３年	夫・妻・子	看護師	２歳
I氏	39歳	自営業	4年	夫・妻・子２人	看護師	２歳と０歳
J氏	43歳	会社員	２年	夫・妻・子	幼稚園教諭	２歳

筆者作成

(4)調査方法

事前に調査協力者の選定を依頼した保育所に、調査依頼書と調査主旨説明書を送付した。次に依頼をした保育所の職員が保育所内の父親の中から、調査協力者を選定し、選定された

調査協力者には、事前に調査依頼書と調査主旨説明書を配布した。

調査方法はインタビュー調査を行った。個別での半構造化面接を行いＩＣレコーダーでの録音及び筆記にてノートに記録した。調査時間は１名あたり60分～90分程度であった。

(5)調査日時

2019年８月１日～９月30日

(6)インタビューの内容

調査対象者の父親へのインタビュー内容は、①父親の子育ての認識及び様子、②父親が保育士に行う子育てに関する相談等、③父親が保育士から得る子育てに関する情報等、④保護者同士の関わり、⑤保育士から受けたニーズにあった個別の対応で、この５点の内容について聞き取りを行った。

(7)分析の方法及び手順

本研究は、ＳＣＡＴ（Steps for Coding Theorization）（大谷 2008, 2011, 2019）を用いた。ＳＣＡＴは、質的データの困難さという問題を克服するために開発された手法である。ＳＣＡＴは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、(1)データの中の注目すべき語句、(2)それを言いかえるためのテキスト外の語句、(3)それを説明するようなテキスト外の概念、(4)そこから浮かび上がるテーマ・構成概念、の順にコードを考えて付していく４段階のコーディングと、テーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、次に理論を記述する手続きとからなる分析手法である。

本研究は、まず10名の対象者のインタビュー内容を逐語録化した。次に１名ずつ逐語録からデータをセグメント化し、ＳＣＡＴを用いて分析した。そしてストーリー・ラインを作成した。最後に10名分のストーリー・ラインをまとめて、１つのストーリー・ラインを作成し、最後に前述の４つの項目の視点とその他のストーリー・ラインから、最終的なストーリー・ラインを作成し、記述した。本研究結果のストーリー・ラインには、〔 〕の文章があるが、これはＳＣＡＴのコーディングに出てきた「テーマ・構成概念」のコードである。

(8)倫理的配慮

本調査は、東洋大学大学院ライフデザイン学研究科研究等倫理委員会において承認を得て実施した（No.2019-2S）。調査協力者及び調査協力を依頼した保育所には、事前に調査依頼書と調査主旨説明書を送付した。また、調査協力者には調査時に調査概要を書面と口頭で説明し、理解をして頂いたうえで、「調査・実験に参加する同意書」と「個人情報利用に関する同意書」にて調査協力の承諾を得た。

4.結果

本節では、本調査の結果として、各視点ごとに作成したストーリー・ラインを記していく。

(1)自身の子育てに関する支援

父親は、〔子どもの発達の様子〕の〔父親にとっての心配事〕の相談や〔保育所での生活の確認〕などを専門家にしていた。保育士に対して〔子どもに関する専門家〕という認識があり、子どもや子育てに関する〔専門的回答に期待〕や〔専門的助言に期待〕していた。

父親は子どもの送迎時や連絡帳といった〔連絡手段を用いた相談〕から〔専門的助言〕を得ていた。父親にとって保育所は入所時から〔早期から育児の拠点〕となり〔早期の段階での問いかけ〕ができたとする一方、保育士とは〔入所時の関係の薄さ〕があることから質問や相談することができなかったが、〔専門家との関わりの日々の蓄積〕から関係構築できるとし、質問や相談できるように変化した。また、〔送迎時の専門家から子どもの様子の伝達〕をする場面において、〔相談できる機会と判断〕することで〔子どもの様子から相談する機会〕となった。

求めている支援では、相談できると思っていたが〔相談するタイミングの曖昧さ〕から〔聞くことを躊躇する〕父親もいた。そのため、〔専門家からの仕掛け〕が必要とされており、〔専門家からの仕掛け〕があると話しやすくなっていた。

(2)子どもに関する知識の提供

父親にとって保育士との会話は〔父親にとって学びの場〕となっていた。また、〔連絡帳〕も〔日々の連絡手段からの学び〕となり、父親の子育て実践の力の向上につながっていた。父親にとって〔迎への対応時〕が〔専門的技術の学び〕となる機会で、〔お迎え時がより学ぶ機会が増加した〕。〔送りの対応時に子ども同士の関係を把握〕することや送迎時の〔保育所での気づき〕は〔同年齢の子どもの様子を把握〕し〔自身の子どもと成長発達を見比べていた〕。父親は保育士といった〔専門家の関わりを見て得ること〕があり、〔専門家の関わりを把握〕することは〔専門家からの学び〕や〔専門家の関わり方を把握することで安堵〕していた。また、保育士との会話から〔子どもの新しい一面の情報〕を得ていた。

父親にとって〔行事は子どもの保育所での生活を見る場〕になっており、〔自分の子どもの行事での気になる姿〕が目に入るが、その場面での〔専門家の様子からの気づき〕もあり、〔専門家の保育の実践からの学び〕は父親の子育て実践の力の向上につながっていた。また、保育所での子どもの成長を帰宅後に発見したことがあることや持って帰ってきた制作物から父親の子育て実践の力が向上していた。

求めている支援として、〔子どもの日常生活の関心〕があり、〔保育所の観察〕を希望して

いた。

(3)保護者間の交流の機会

求めている支援について、〔保護者同士の交流に消極的〕な父親もいるが、大半は〔保護者同士の交流希望〕があった。保護者同士の交流から求めていたのは、〔他人の子どもと自分の子どもの情報交換〕、〔子どもに関する情報共有〕であり、子どもや子育てに関する〔情報を得る〕機会として保護者同士の交流を期待していた。〔保護者のまとめ役の存在の有無と保護者交流への影響〕が関係している中、父親同士の交流がないのは、〔父親間のまとめ役の不在〕や〔男らしさの存在〕があり、それには〔男らしさが参加に影響〕していることが挙げられた。また、保育所に対して〔母親と子どもが主体という認識〕を持っており、行事には〔対象者の不明確さ〕があり、〔対象者としての自覚のない父親〕がいた。

父親が交流する為には、〔保育所での親が参加する行事〕にて〔父親が交流できる環境〕が必要であった。それには、〔専門家の援助が必要〕であり〔行事の中で親同士の関わりを促す環境を作る〕ことや〔父親が参加しやすい日時での開催〕と〔父親も対象者であることを明確にする必要性〕が求められていた。そして、父親同士の交流には〔心理的に良い影響を与える可能性〕があった。しかし、子どもが障害を抱えている父親は、〔子どもの育ちの差〕があることから、〔会話の内容が合わない〕ことを懸念していた。

(4)個別ニーズへの支援

現在得ている支援について、〔父親の子育ての悩み〕を保育士に相談し、保育士からの〔専門家の助言〕や〔専門家の模範行動〕から〔父親にとって学びの時間〕となることや〔個別の専門家への相談〕で〔専門的助言〕を得て、〔精神的に安堵〕していた。また父親は、連絡帳といった〔連絡手段を用いて専門家に相談〕し〔父親と専門家の対話〕をしていることもあった。障害を抱えている子どもの父親は入所時から〔状況によって変化する支援〕をしてもらい〔子どもに対応した保育〕をしてもらっていた。

求めている支援について、父親の中には保護者への個別支援は〔専門家の役割外〕と考えている方もいた。父親は保育士に対して〔多忙な専門家〕という印象を抱いており、〔相談することへの遠慮〕や〔相談することを躊躇する〕としていた。また、〔相談するタイミングの不明確さ〕や〔相談範囲の不明確さ〕もあるとされた。そのために保育所は〔気軽に相談できる機会〕や〔気軽に話せる場〕といったことから、〔相談窓口の必要性〕が求められていた。そして父親がより相談しやすくするために、〔専門家からの仕掛け〕が必要であった。また、父親が〔遠慮せず連絡できる方法の必要性〕があるとされ、〔連絡帳は遠慮しない連絡手段〕があげられた。そのために保育所は父親が連絡帳を〔連絡手段として把握する為の周知〕が必要であった。

(5)その他

父親は自身の子育てに関して〔父親の幼少期の環境〕の影響と〔父親自身の親からの影響〕があった。個人差はあるものの〔父親が担う育児役割〕と〔父親が担う家事役割〕を行っていた。そして父親は〔自分の子の発達に関する心配〕など不安を抱えていた。

しかし、父親は保育所以外の施設について、〔施設概要を把握していない〕ことや〔行きづらい立地で利用はしない〕といったこと、また〔母親が多い〕ことから〔施設で利用しづらさを感じる〕ことや施設は〔母親の居場所〕と認識し、〔父親の居場所がない印象〕があった。その中で、〔保育所が父親にとっての子育て拠点〕という認識を持っていた。

5.考察

本節では保育所に求められている父親への子育て支援について、本調査結果から分析の視点ごとに導き出されたストーリー・ラインから考察する。

「自身の子育てに関する支援」では、父親との関わりの中で、相談等ができる機会と判断できるように専門家からの仕掛けが求められていると考えられた。専門家からの仕掛けとは、例として父親と保育士の関わりや会話の中で、子どもに関する日々の報告や情報交換の際に父親側に「気になること」や「心配していること」、「聞きたいこと」があるか明確に問いかけることや話す時間がある様子や行動を保育士が示すことなどである。保育者が普段の送迎の際、保護者に子どもの様子などを伝える等の会話から、保育士は保護者にとって身近な子育ての相談相手になるとされているが（松尾 2015）、保育士からの問い掛けや行動によって、父親が相談できる機会と判断すれば、父親は相談や会話と保育士とすることができると考えられる。そのため保育士は、父親が明確に相談できると思える関わりをすることが必要であろう。

「子どもに関する知識の提供」においては、父親は送迎時や行事にて、保育士と子どもの関わりを見ることで得るものがあり、子育て実践の力の向上に繋がっていた。そして、父親が「子どもに関する知識の提供」で求めている支援は、保育所の観察という結果であった。先行研究においても保護者支援における間接的手段のひとつに、保育場面での子どもとの関わりが挙げられていた（西村 2016）ことから、具体的には送迎時や行事にて、保育士と子どもの関わりや子どもの様子を父親が見ることのできる機会や場面を作ることを父親は求めていることと考えられる。

保育所保育指針（2017）において保育所の特性として、継続的に子どもの発達の援助及び保護者に対する子育て支援ができることとされているが、継続的に支援する方法は日々の会話や連絡帳のやり取りが考えられる。そのため、保育士に求められていることは、父親の送迎の際には、保育室内での子どもの様子や保育士と子どもの関わりを少しでも見るような、機会や時間を設けることではないだろうか。その時の状況によるが、子どもに

関する知識の提供の視点における保育士に求められる子育て支援は、父親の送迎や行事の際に子どもたちの様子や保育士と子どもの関わりを見ることのできる時間と機会を設けることであると考えられる。

「保護者間の交流の機会」では、父親は保育所について、母親と子どもが主体と認識しているといった背景はあるが、父親は親同士の関わりや行事にて交流できる環境が必要としていた。そのうえで父親は保育士に対して、①父親が行事等の対象者と自覚するための入所時からの継続的な周知、②行事の中で、保護者が交流できる時間を設け、保育士が声掛け等を行い、保護者間の交流の機会を提供する、③個別のニーズを持つ父親の保護者間の交流が必要という3点を父親は求めている。田辺（2017a）によると、子どもが通う施設は父親と支援者がつながりやすいとして、子どもの話題を父親と共有できることは、父親への子育て支援の中では大きな強みになるとしている。そのため、本調査の父親は保護者交流を必要とする傾向があることや、消極的な場合でも情報交換する関係は望んでいたということは、父親への子育て支援へと繋がっていく可能性がある。

そして、本調査から父親が保護者同士や父親同士の交流をするためには、交流するきっかけが必要であるとされ、行事の際に保育所主導で保育士の声掛けにて保護者間の交流の機会の提供を求めていることがわかった。しかしながら、父親自身が行事に参加する対象者という自覚がない場合もあり、保護者が交流する機会の可能性がある行事への参加のしづらさを感じていることがわかった。そのため、父親に行事への参加を促すことや参加対象者と自覚できるような周知をすることが必要である。

ゆえに保護者間の交流の機会において保育士は、入所時から日々の送迎での父親との関わりや連絡帳やお知らせから、父親は行事等の対象者であることを継続的に周知することと、現在行われている行事にて、保育士が主導で保護者交流できる機会や時間及びプログラムを提供し、保護者たちの様子を見て、状況に応じて関わりやすいように声掛けを行うことが保育士に求められた子育て支援である。

「個別ニーズへの支援」では、父親は保護者への個別支援は保育士にとって役割外という認識をしており、父親は保育士が多忙という印象から相談することなどを躊躇していた。そのことから、父親は保育士に対して、①父親が保育所の役割と保育士の業務内容を把握するために入所時から周知すること、②保育所は気軽に話せる場や機会を整え、相談窓口としての役割を担うこと、③父親がより相談しやすくするための専門家からの仕掛け、④父親に対して入所時から日々の関わりから連絡帳の使用方法を周知することを求めている。

保育所は父親から子育て等に関する相談窓口としての役割が求められていた。保育所は、保育所保育指針（2017）にて他の専門機関との連携することは求められているため、保護者への個別の支援や他機関との連携が必要な場合は、窓口として機能できるように常に相談できる場を明確にしておく必要がある。しかし、保護者が相談できる場、気軽に話せる場を整

えるということに関しては、各保育所によって状況が異なるため、求められていることに対応しきれないことが懸念される。そのため、保育所が個別支援の窓口になっていることを周知し父親が把握すること、そのうえで保育士が他機関につなげることが必要である。

保育所の父親支援の取り組みとして、入園前説明会等の入園前後の関わりや保護者説明会が挙げられている（濱崎 2017）こともあり、保育所の役割と保育士の業務内容、連絡帳の使用方法を入所前から説明会において周知し、入所後は日々の送迎での関わりや連絡帳等や保護者説明会、行事を活用して継続的に周知していくこと、および相談窓口をとという機能を担い、他機関と連携することが保育士に求められている。

最後に「その他」の結果についてである。先行研究では、保育所以外の施設に関して、父親への支援が充実しているとは言い難い状況（鈴木 2011a, 鈴木 2011b, 小崎 2011, 正田ら 2016, 小崎ら 2018）であったが、本調査では、父親が施設の概要を把握していないことや、立地が行きづらく利用していない、母親が多いことで利用しづらさを感じ、施設は母親の居場所と認識し、父親の居場所がないとされた。正田ら（2016）の児童館へのアンケート調査にて、男性は女性中心であった育児の現場に入ってくることへの困惑があることが明らかになっているが、本調査も踏まえ、父親が子育てに関する施設等を利用する際は、母親や女性の多さなどが利用しづらくしている要因になっているといえるだろう。ゆえに父親にとってのフォーマルな社会資源である保育所以外の施設に関して、本調査と先行研究から、父親にとって子育ての社会資源として機能していないと考えられる。

先行研究では、子育てしている人にとって、保育所は社会資源になるとされ（春見 2016, 西川 2016）、子育て経験のない親は、保育士等の子育て支援の専門家からのアドバイスに頼ることが多く、その影響はかなり大きいとされている（巽 2018）。本調査では、父親にとって保育所は子育ての拠点という認識であった為、保育所及び保育士は、父親にとって子育てに関する社会資源として相談しやすい環境、支援を求める環境となるための取り組みを行うことが求められる。

また、父親の子育ては自身の父親の子育ての関わり方に影響を受けていることがわかった。しかし近年わが国では、男性の育児休業取得の促進や父親が子育てを行うことが促進されてきており、影響を受けている自身の父親とは異なる子育ての社会状況になっている。そして、父親の子育て環境や背景、子育て支援の状況は母親とは異なっていると考えられる。このようなことから、父親は影響を受けている自身の父親とは異なる社会状況、母親とも異なる子育て状況や子育て環境で子育てを行っている現状であることを認識したうえで、父親への子育て支援を行うべきではないだろうか。そのため、保育士が父親の特性や父親自身の子育てに関する背景を理解し、父親への子育て支援を行うとしたうえで、援助関係の形成の基本原則を検討すると、個別化（バイステック 2006）が重要であろう。援助関係の形成の基本原則としての個別化（バイステック 2006）を用いて、父親の子育て状況のニーズに合致する

子育ての支援を展開していくことが必要である。

ゆえに、個別化と支援において当事者である父親と社会資源のありように着目し、そこに介入するような、ソーシャルワークの原則を基盤とし、視点ごとに明らかになった具体的な支援を行うことが、保育士に求められている父親への子育て支援であると考えられる。そのうえで、父親に対して保育士がこれらの支援を行っていくことは、父親にとってより子育てしやすい環境になることにつながり、父親の子育て実践の力の向上にも良い影響を与えることになっていくであろう。

6. 結論

保育所保育士に求められている子育て支援は、保育士は父親にとっての社会資源として相談しやすい環境、支援を求めることができる環境をつくるための取り組みを十分に行うことである。その際には、ソーシャルワークの原則である人々と環境とが相互に影響し合う接点に介入することと個別化を基盤とした支援を行うことである。

具体的には、まず「自身の子育てに関する支援」において保育士は、父親が明確に相談できると思える関わりをすることである。次に「子どもに関する知識の提供」において、親の送迎や行事の際に子どもたちの様子や保育士と子どもの関わりを見ることのできる時間と機会を設けることである。そして、「保護者間の交流の機会」では、入所時から日々の送迎での父親との関わりや連絡帳やお知らせから、父親は行事等における対象者であることを継続的に周知するとともに、現在行われている行事にて、保育士が主導で保護者交流できる機会や時間及びプログラムを提供し、保護者たちの様子を見て、状況に応じて関わりやすいように声掛けを行うこと。最後に「個別ニーズへの支援」として、保育所の役割と保育士の業務内容、連絡帳の使用方法を入所前から説明会において周知し、入所後は日々の送迎での関わりや連絡帳や保護者説明会、行事を活用して継続的に周知していくこと、および相談窓口という機能を担い、他機関と連携することである。

7. おわりに

本研究では、保育所保育士に求められている父親への子育て支援を各視点ごとに明らかにすることはできたが、具体的な支援方法について検討することはできなかった。今後は、具体的な父親への支援方法の検討や提案をしていくことが必要である。

※本稿は、2019年度に東洋大学大学院ライフデザイン学研究科に提出した修士学位論文を基に加筆・修正したものである。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2015)「第3回 乳幼児の父親についての調査[2014年]」
https://berd.benesse.jp/up_images/research/Father_03-ALL2.pdf (2019.7.26)
- 春見静子 (2011)「相談援助の対象」 春見静子・澁谷昌史編著『相談援助』 光生館46-56.
- 船橋恵子 (2012)「『仕事と育児』 バランスをめぐる男性意識—どのようにパートナーと分かち合おうとしているのか」 目黒依子 矢澤澄子 岡本英雄編『揺らぐ男性のジェンダー意識 仕事・家族・介護』 新曜社88-113.
- 濱崎 格 (2017)「保育所における父親への子育て支援」 小崎恭弘 田辺昌吾 松本しのぶ 編「家族・働き方・社会を変える父親への子育て支援—少子化対策の切り札」 ミネルヴァ書房72-77.
- 厚生労働省 (2017)「保育所保育指針<平成29年告示>」 フレーベル館
- 厚生労働省編 (2018)「保育所保育指針解説書」 フレーベル館
- 小崎恭弘 (2011)「子育て支援における父親支援プログラムの取り組み —全国子育て支援センターアンケート調査結果より—」『子ども家庭福祉学』 11,25-34.
- 小崎恭弘 阿川勇太 (2018)「父親の自主的な活動の考察—我が国における父親サークル調査より—」『生活文化研究』 55,23-32.
- 西川知亨 (2016)「<オトコの育児>のゆくえ」 工藤保則 西川知亨 山田容 編著『<オトコの育児>の社会学 —家族をめぐる喜びととまどい—』 ミネルヴァ書房233-244.
- 西村真実 (2016)「保育所入所児童の保護者への保育相談支援」 柏女霊峰 橋本真紀『保育相談支援 [第2版]』 第2版 ミネルヴァ書房93-121.
- 松尾寛子 (2015)「子育て支援を見越した保育所における保護者との連携方法について - H県における保育所の送迎方法についての調査とある市における送迎保育ステーション事業について - 」『神戸常盤大学紀要』 8,17-27.
- 大谷 尚 (2008)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 S C A T の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達学研究科紀要 (教育科学)』 54,(2),27-44.
- 大谷 尚 (2011)「S C A T : Steps for coding and Theorization ; 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適応可能な質的データ分析手法」『日本感性工学会 感性工学 ; 日本感性工学会論文誌』 10,(3),155-160.
- 大谷 尚 (2019)「質的研究の考え方」 名古屋大学出版
- 清水嘉子 (2006)「父親の育児ストレスの実態に関する研究」『小児保健研究』 65,(1),26-34.
- 柴山真琴 (2007)「共働き夫婦における子どもの送迎分担過程の質的研究」『発達心理学研究』 18,(2),120-131.
- 鈴木順子 (2011a)「父親の子育て支援に関する研究 : 地域子育て支援センターを利用する父

- 親を対象として」『金城学院大学論集 人文科学編』 8,(1),124-133.
- 鈴木順子 (2011b)「地域子育て支援センター利用の意義と効果に関する研究—父親と母親の利用実態の比較調査から—」『家庭教育研究』 16,73-82.
- 正田小百合・佐藤克志 (2016)「杉並区における子育て支援施設利用の実態と課題」『日本女子大学紀要家政学部』 63,27-35.
- 田辺昌吾 (2017a)「父親の子育て支援の具体的な取り組み」小崎恭弘 田辺昌吾 松本しのぶ編 「家族・働き方・社会を変える父親への子育て支援—少子化対策の切り札」ミネルヴァ書房56-59.
- 田辺昌吾 (2017b)「父親の子育て支援の課題と展望」小崎恭弘 田辺昌吾 松本しのぶ編 「家族・働き方・社会を変える父親への子育て支援—少子化対策の切り札」ミネルヴァ書房218-222.
- 巽真理子 (2018)「イクメンじゃない『父親の子育て』 現代日本における父親の男らしさと＜ケアとしての子育て＞」晃洋書房
- 柳原真知子 (2007)「父親の育児参加の実態」『天使大学紀要』 7,47-56.

Study on child-rearing support for fathers required by nursery school nursery teachers -From an interview survey with his father-

OKAMURA, Yasuhiro

Keywords: father, child-rearing support, nursery teacher

Abstract

The purpose of this study is to clarify what kind of child-rearing support is required of nursery school nursery teachers for fathers who have children in the nursery school.

In this study, we conducted an interview survey with 10 fathers who met the selection conditions such as having children in a nursery school, and analyzed the obtained data for 10 fathers by SCAT. Then, the story line was divided into "support for own child-rearing," "providing knowledge about children," "opportunity for interaction between parents," "support for individual needs," and "others."

The father recognized that the nursery school was a base for raising children, but it was thought that facilities other than the nursery school did not function as a social resource for raising children. Therefore, nursery schools and nursery teachers are required to make efforts to create an environment where fathers can easily consult as social resources related to child-rearing and seek support.

For these reasons, childcare support for fathers, which is required of nursery school nursery teachers, is to make sufficient efforts to create an environment in which nursery teachers can easily consult as a social resource and can ask for support. In that case, the father should intervene in the points of contact where people and the environment interact with each other, which is the principle of social work, and provide support based on individualization. It became clear that there is a need to engage in relationships that seem to be clearly consultable.